

京都「市民意識」の研究

山岡 栄市

一、はじめに

古い歴史と伝統をもつ京都市の風土は、他の大都市、例えば東京や大阪にくらべて「より、保守的である」と考えられるのに、最近の政治的状况はそれに反して「京都こそ革新の灯台である」などともいわれている。一見矛盾したこの両面性はどのように理解したらよいのであろうか。「矛盾したもの、自己同一」ということを弁証法でいつているが、京都の「市民意識」ないし京都人の精神構造のうちにはたしかに、「保守的なもの」と「革新的な

もの」とが鮮やかな形で共存しているように思われる。この矛盾的性格を社会的な側面から調査研究しようというのが、われわれ社会学研究室の課題の一つである。京都人の性格については従来多くの歴史学者や文化人類学者等によって研究されているが、それを社会学の面から明らかにしてみようというわけである。この課題を設定したのは一昨年の秋であつたが、各自の専門分野の研究と講義などに追われ、昨年中は従来の諸家の研究を検討することに費された。昨秋、それと併行し

て、われわれの立場から問題の所在を探究する手がかりとして第一回の世論調査を試み、現在その集計分析を進めている段階である。

二、市民意識研究の現状

「市民意識」ないし「生活意識」や「住民意識」についてはそれぞれの研究者が一応の定義を与えているが、それらの異同について比較検討することは、ここでは省略したい。市民意識を中心として考察する過程で漸次明らかになるであろう。市民意識の研究としては

次のようなものがある。

(一)新明正道 「市民意識の社会学的考察」、

(二)都市問題 五四一七、一九六三、所収)

(二)近江哲男 「市民意識調査の方法と問題点」、

(全前)

(三)磯村英一・奥田道大 「東京都における市

民意識の調査ノート」、(全前)

(四)倉沢 進 「市民意識の開発と方法」、(都

市問題 六二一七、一九七一、所収)

(五)池内一編 「市民意識の研究」、一九七四、

東大出版会)

京都に関する同種調査には次のものがある。

(一)京都経済同友会 「京都市民の社会意識—

市民意識に関する実態調査報告—」、(一

九七〇—七一、現代人、所収)

(二)京都市民意識研究会 (清水敬次・三宅一

郎) 「京都市における市民意識(1)」

(三)橋本 真 「京都の社会と京都人の性格」

(ライブラリーシリーズ「京都」所収、

一九六二)

以上のうち、その代表的見解を示すものと

して、社会学界の長老新明正道教授のそれを

紹介する。

新明教授によると、市民意識の研究には二

つの源流があるとされる。一つは、市民精神を

「市民社会の意識、市民階級の意識」という風

に考えるものであり、いわば西欧の源流ともい

うべきものである。その例として、マックス・ウ

ェーバーの「プロテスタントの倫理と資本主義

の精神」(Die protestantische Ethik und der

„Geist“ des Kapitalismus 1906)をあげられる。

周知のようにプロテスタントの倫理観では、

職業をば神から与えられた天職(Beruf, calling)

に専念する。それは神聖なる労働の果実を使

い果たすのでなく、禁欲の精神をもって蓄積

にはげむ近代資本家の経済合理主義の精神、

資本蓄積の精神を育てる力となったというの

である。このようなプロテスタントの倫理が

「近代市民社会の意識」(市民階級の意識)を

育くんだ源流であるとみるのである。いま一

つの源流はアメリカの都市社会学であるとさ

れる。すなわちアメリカ都市社会学で「都市

的人格」(Urban Personality)なことはア

ーバニズム(Urbanism)「都市的生活様式」

(Urban Mode of Life)と呼ばれるも

のが市民意識研究の源流であるとされる。

ところで新明教授によれば、アメリカ社会

学には歴史性が欠けている、またその考え方

によると全体社会との関連が見失われる傾向

があるとし、したがって「市民意識の研究と

しては積極的、に歴史的であるとともに、理論

的一貫性をもったものに昇華して行くため、

アメリカの都市社会学の研究を批判的に検討

する必要がある」と述べ、歴史性と理論性を

もつ第一の西欧の源流を究めることが、市民

意識の研究としては正統的であるとされる。

新明教授がいわれるように、「市民意識」

を考察する場合、西欧における市民意識の形

成の歴史を跡づけてみることはきわめて重要

であり、その意味において私は、増田四郎氏

の『西欧市民意識の形成』(昭和二十四年、春

秋社刊)を断然群を抜いた貴重な業績である

と考えたい。私は西洋経済史の専攻ではない

から、西欧における市民意識形成の歴史を自

ら研究する能力を持たないが、同氏の業績に

導かれながら、京都市民意識の調査研究を進

めるにあたっての所見の一端を述べてみたい。

三、「市民意識」とは何ぞや

「市民意識」の定義を抽象的に述べても余

り意味がないと思われるが、少くともそれが

どういう意味内容を包含するかという点について明らかにすることは最少限必要であると思われる。増田四郎氏は「近代西ヨーロッパの社会に特異なものは何かという疑問に対する一つの解答として、われわれは『公共世界に奉仕する個人の自主的・規範的精神』をとりあげ、この精神をはぐくんだ歴史的・社会的源流として、中世北欧都市の市民意識につきあたったわけである」（増田四郎・『西欧市民意識の形成』二一七頁）と述べていられるが、この「公共世界に奉仕する個人の自主的・規範的精神」こそ市民意識の中核要素であると私も考えたい。

私は去る昭和四十二年の盛夏、一ヶ月間の欧州旅行をしたことがあるが、南独の町マンハイムに宿泊した翌朝、たま／＼宿舍の近くにある広場を散歩する機会に恵まれた。さん／＼たる朝の太陽の下、スプリングラーから勢よく噴出する水しぶきを浴びて、広場一ぱいの花も緑も一きわみず／＼しく感じられた、そのときの光景を思い出す。その静かで新鮮な美しい人工美のなかで、人びとはベンチに憩いあるいは三々五々朝の散歩を楽しんでいる。どうしてこういう美しい広場の自然がっ

くり出せるのであろうか。それはヨーロッパ人の居住様式から出て来るときかされてなるほどと了解できた。周知のように欧州人の住居はレンガや鉄筋コンクリートで外枠がつくられておりその生活空間が狭く限定されている。日本の住居のようにふすまを外して部屋を広狭自由にすることは容易でないし、まして庭園に草花や樹木を植えて楽しむことはできない。一般庶民の生活では緑と空間が是非欲しいのである。そこで共同の空間と緑を提供するものとして公園や広場が生まれてくる。緑と空間への欲求を日本人は庭園を作つて、いわば個人の家庭レベルで解決しているが、

西欧人は町あるいは村、つまり自治体レベルで広場や公園をつくつて解決しているのである。そこは自分達の共同の空間であり、共同の緑の場なのである。そこでこれを自主的かつ有効に愛護し、かつ管理して行こうとする精神が生まれてくる。市民一人ひとりの協力によって公共世界を創り上げて行く努力が、歴史の年輪とともに積み重ねられたのである。上述した「住民意識」とか「生活意識」とかが、「事実としての存在としての社会意識」であるのに対し、「市民意識」は公共世

界と個人との関係を前提にし、公共世界に奉仕する個人の義務意識としての規範性をもった意識である。この規範意識こそ市民意識の核心であると考ええる。例えば市バスや市電に「老人や身体の不自由な人びと」のために特別席が設けてあるが、そういう人びとが乗車して来られた際に快く自然に席を譲るべきだという規範意識がどれほど京都市民の心の中に定着しているであろうか。知つてもそれが実行されないとき、京都人の市民意識が問題とされるのである。また京都では江戸時代の昔から自分の家の前だけは清掃につとめることが、市民の義務とされてきたが、この仕来りは今でもよく守られているようである。私たちのアンケート調査で「京都の街路は観光都市の街路としてきれいだと思いか、それともきたないと思いますか」という問に対して、①非常にきれいだ……五〇％、②まあまあきれいだ……四三・五三％、③あまりきれいでない……二七・四三％、④非常にきたない……二・六％（AとB%としているのは、母集団の右京と中京とのズレである。）の結果となっている。では「それをきれいにするのは誰の責任と義務なのでしょう

か」とた、みかけてきくと、①役所の責任……一二・一二二%、②特志家の義務……一・一%、③市民一人ひとりの義務……七六・八三%という結果が出て、まことに市民意識の健全を想わせる。しかしこれもまた模範答案の建て前論というべきであらうか。

ともあれ、市民意識というものは、このような規範意識を中核とするものであり、それが市民一般の意識に定着するまでには長い間の訓練と習熟を必要とするのである。換言すれば、一定の歴史的、社会的過程を経てはじめて市民の意識に定着し、また日々の実践的行為によってそれがたしかめられ、生成発展するものである。

さて、「規範意識が市民意識の中核である」とはいっても、そのみに限定しては狭きに失するのであり、その周辺意識としての「存在としての意識」もまた市民意識の内容をなすものと考えたい。例えば、京都市民の政党支持意識や、さらにその前提であり基盤であるところの党派性（ムードとしての、あるいは物の考え方としての保守的乃至革新的傾向性）なども市民意識の内容を構成するものと考えたい。

また京都の教育は「高校三原則」その他にみられるように、他の都市と比べて非常にちがった特色を持っているといわれているが、そしてそれがどの程度京都市民のコンセンサスになっているかわからないが、とにかくそうした「教育に対する京都市民の考え方の特徴」といったものも、京都の市民意識の内容をなすものであると考えたい。（市民意識の「構造図」は略す）

市民意識の中核はその規範意識にあるが、その内容はこのように極めて重層的多岐にわたるので、その調査研究にはかなりの長年月を必要とするし、社会学をはじめ文化人類学、社会心理学、民俗学、歴史学、人文地理学、教育学等々、多くの学問の協力が必要である。

四、市民意識の研究法

市民意識の研究方法もまた多面的であるが、わたしは大別して二つの側面からアプローチしてみたいと思う。

(一)市民意識の形成過程の研究（歴史的・文化人類学的）

例えば、京都市民の保守的性格を規定するものには、①市民の老令人口比の高いこと（伝

統意識のトレイガーは概して老人人口である。六五才以上の人口比をみると東京が二・四%であるのに対し大阪は五・九%、京都は七・九%）②定着年数の古い市民が多いこと（流動人口は都市の伝統的生活になじまない、出生時から現在までその都市に住んでいる人口比は札幌が一・九%であるのに対し、東京は一七・〇%、大阪は二九・二%、京都は二四・七%と、京都は十大都市のうち最高である）。以上の二つの要因もその説明理由になるが、もっと基本的には、千年の古い歴史をもつ京都の風土、とくにその中のどのようなフアクターが京都市民の保守性を形成してきたかを問題としなければならない。例えば京都の町内会の歴史は、戦国時代―戦火たえ間のなかった無秩序の時代に、近隣相互が自衛と協力のために町組を形成し、それが江戸時代から明治に受け継がれ、明治三十年の公同会に結実し、さらに今日の町内会の伝統になっているといわれる。さらにまた京都では明治初年、町組を基盤にして出来た学区の制度を今もなお守り続けているのである。他所では小学校の統合が行なわれているが旧上京・下京地区ではそれに強く抵抗し、元学区を守り抜こう

としているのである。

次に「革新の灯台」といわれる革新性について、京都府、とくに京都市における革新政党支持率の高いことはどのように説明したらよいのであろうか。明治の初め首都が東京に移って以来、京都は東京に対して強い対抗意識をもち、「東京に負けてはならぬ」という心意気で対処したので、日本一が京都には沢山あるといわれている。日本一古い小学校は明治二年五月開設の柳池校、日本一古い発電所は明治二四年に出来た蹴上水力発電所、電車で日本一早く出来たのは明治二十八年一月三十一日開業したチンチン電車である、といった工合である。京都にはまた大正末期から昭和初期にかけて山本宣治、昭和に入って河上肇博士らの影響が強かったし、昭和初期から戦後の昭和四十八年頃まで水谷長三郎、大山郁夫、谷口善太郎らが革新党を代表して長く国会議員の座を占めたが、これら革新の灯火を燃やし続けるエネルギーはどこから流れ出るのであろうか。国家権力の所在地たる首都東京に対する対抗心が京都市民に革新の気風を育て、来たのではないか、こうしたことを歴史学や政治史・社会史などの研究によつ

て実証的に明らかにしてゆく必要がある。いま同問題が大変やかましいが、大正十一年三月三日、全国水平社創立大会が岡崎公会堂で開催され、二千名が参集したといわれているが、こうした水平社運動もまた、京都人の革新的気風を育てたにちがいない。また京都大学をはじめ、京の学者・文化人が革新的風土を育成する先駆的役割を果たしたことも忘れてはなるまい。

(二)市民意識の実態（現状）を研究する方法

市民意識の形成過程を歴史的に跡づけるとともに、その実態を客観的に把握する方法として次の二つが考えられる。

- (1)市民意識が客観的に表現されるような社会的現象、例えば各種の選挙の結果はいうまでもなく、選挙運動期間における各候補者の運動方法とそれに対する市民の対応の仕方、世論の動きなどを客観的に分析する方法である。物価問題・公害問題・住民運動などにみられる市民の抗議行動の特徴などをジャーナリスチックな感覚で把握する方法。

- (2)世論調査による市民意識の実体把握。
以上の調査方法のうち今回はとりあえず中

表1 Q18 京都は進歩的都市か保守的都市か () 内比率%

| 調査地 性別 | | 1 進歩的と思う | 2 どちらともいえぬ | 3 保守的と思う | 4 D.K | 計 |
|--------|---|-------------|---------------|-------------|----------|------------|
| 中 京 区 | 男 | 17 (18.7) | 34 (37.4) | 40 (44.0) | 0 | 91(100.0) |
| | 女 | 29 (19.5) | 64 (43.0) | 55 (36.9) | 1 (0.6) | 149(100.0) |
| | 計 | 46 (19.2) | 98 (40.8) | 95 (39.6) | 1 (0.4) | 240(100.0) |
| 右 京 区 | 男 | 22 (15.8) | 60 (43.2) | 46 (33.1) | 3 (2.2) | 139(100.0) |
| | 女 | 19 (14.0) | 78 (57.4) | 46 (33.8) | 1 (0.7) | 136(100.0) |
| | 計 | 41 (14.9) | 138 (50.2) | 92 (33.5) | 4 (1.5) | 275(100.0) |

京区・右京区を母集団とし、そこから各四百宛、計八百のサンプルを抽出して(2)の世論調査を試みたのである。

五、今回の世論調査の結果

中京区は古い住民の多い都心部七校区、右京区は新しい住民の多い周辺部の桂学区を対象とした。種々の理由で調査不能が多かったが、関係者の努力によって五一五(回収率六四%)の有効サンプルを得た。調査結果についてはまだ詳細な分析を行なっていないので、ごく一部分だけを紹介するにとどめ、詳細は後日の報告書にゆずりたい。

アンケートの18問で「あなたは京都を進歩的な都市と思いますか、それとも保守的な都市と思いますか」とたずねたが、その結果は1表の通りである。「どちらともいえず」と答えたものは中京と右京とで10%の差異があり、新しい市民の多い右京区が高率である。両地区とも「保守的と思う」ものが「進歩的と思う」ものよりも高率で、中京では三九・六%、一九・二%で二〇%の差があり、右京でも三三・五%、一四・九%で一九%の差があり、あきらかに京都市民は自らの町を「進

歩的である」よりも「保守的である」と考えているのである。このことに男女差は余りな

表2 政党支持率(47年総選挙時) %

| | 1 自 民 | 2 民 社 | 3 公 明 | 4 社 会 | 5 共 産 |
|-----|----------|----------|----------|----------|----------|
| 中 京 | 29 | 17 | 12 | 12 | 30 |
| 右 京 | 29 | 11 | 15 | 18 | 27 |

表3 政党支持率の変化(44年総選挙対47年総選挙) %

| | 1 自 民 | 2 民 社 | 3 公 明 | 4 社 会 | 5 共 産 |
|-----|----------|----------|----------|----------|----------|
| 中 京 | (-) 89 | (-) 94 | 85 | (-) 92 | (+) 143 |
| 右 京 | (+) 115 | (+) 103 | 85 | (+) 161 | (+) 130 |

いようである。しかし、これを年令別にみると、高年令層ほど「進歩的である」と思い、若い年令層ほど「保守的だと思っている」という興味ある結果が出て来る。

では両区の政党支持率はどうであろうか。四七年の総選挙についてみたのが2表であり、四四年総選挙と四七年総選挙を比較したのが3表である。2表によると、都心部の中京区で共産党は自民党を上廻つて三〇%、右京区でも二七%をしめている。民社以下を革新政党とするならば両区とも七割までは革新支持である。京都の都市的風土は「保守的である」と評価されても市民の政党支持意識はたしかに革新的である。つぎに支持意識の変化を3表によつてみると、中京区では自民の退潮に比して共産の躍進が目ざましく、右京区では共産の伸びもさることながら、社会党の伸びは一六・一%に達している。中京区の共産党支持層、右京区の社会党支持層がいかなる階層(その職業・階級意識・年令層等)に属するかは、きわめて興味ある問題であるが、それはクロСС集計の結果にまたねばならない。時間がないのでこのあたりでお話を終りたい。